

特異的言語障害のスクリーニング検査の作成

橋本竜作 (北海道医療大学 心理科学部 准教授)

【研究背景と目的】

特異的言語障害 (Specific Language Impairment : 以下 SLI) は、言語発達を阻害する知的発達障害や視覚・聴覚といった感覚障害、発声発語器官の運動障害がないにもかかわらず、言語能力に著しい制約が見られる発達障害である。日本語では格助詞の使用や受動態の変換を適切にできないという文法障害として現れる。ただ、日本語は格助詞を省略しても、文脈から相手が意味をくみ取ることができ、会話を続けられる。また、理解面が発達していると、日常生活では言語に問題があるとは分かりにくい。しかし、本人は話しづらさを感じ、作文をうまく書けないなど、言葉にして伝えること (表出面) に困難を持っている。それゆえ、学習障害で相談に来た子どもを評価する際、言語障害の可能性を念頭に置いた見立てをしない限り、文字の読みや書きの評価、つまり言語記号の認知処理を評価されるだけで、言語障害の存在に気づかれないことがある。現在、学童期でも利用可能な言語発達検査はあるが、SLI の特徴を検討する項目は少ない。そこで本研究の目的は SLI のスクリーニング検査 (構文検査) を作成し、その妥当性と信頼性を検討することである。

【構文検査の内容】

SLI 児は主語-目的語-動詞の基本語順文に比べ、目的語-主語-動詞のかき混ぜ語順文の問題文で成績低下が顕著であることから (福田ら、2007)、スクリーニング検査として問題数を増やさず特徴を捉えるために、基本語順文を少なく、かき混ぜ語順文をやや多くなるようにした。検査は3つの課題からなる (図1-3)。

- 1) 格助詞の補完：空欄に格助詞を入れて文を完成させる。
- 2) 態の産出課題：動詞の語尾を変えて文を完成させる。
- 3) 文の理解課題：文に合致する絵を4枚の中から選ぶ。



図1 格助詞の補完課題



図2 態の産出課題



図3 文の理解課題

【結果】

某発達支援センターに相談に来た児童10名に実施した結果、3名が構文検査で成績の低下を示した。そのうち2名は発達性ディスレクシアの基準を満たし、1名は作文の問題 (漢字を誤る、助詞が抜ける) を抱えていた。残り7名は成績低下を示さず、そのうち1名が自閉症スペクトラム症障害 (以下、ASD)、1名が発達性ディスレクシアとASDの合併、5名が発達性ディスレクシアであった。

成績低下を示した3名は共通して受動文や使役文を「かき混ぜ語順」で呈示されたとき、適切に格助詞を使って文を完成させることができなかった。言語発達の経過は2名で遅れていたが、発達性ディスレクシアの中にも言語発達の遅れは存在し、言語発達の遅れの有無で両者を区別することは難しかった。今回、作成した構文検査は、過去に報告されたSLIの特徴 (福田ら、2007) をとらえる上では、スクリーニング検査として有用と考えられた。しかし妥当性を検討するには、ほかの言語能力 (語彙力など) との関連を今後は検討する必要があると考えられた。

信頼性に関して、小学4から6年生の定型発達児のデータを加えて、内的一貫性を検討した結果、クロンバッハ α 係数は格助詞の補完課題で0.8以上と高かったが、ほかの2課題では0.5前後と低かった。その理由は、態の産出課題や文の理解課題の成績では小学4年生で満点を取る児童が多いこと (天井効果) が影響したと考えられた。

今回の結果だけからは、妥当性と信頼性とを十分に示すまではいかなかったが、さらに事例を重ねつつ、検討を進める予定である。ただ、本検査によって言語の問題を持つ児童が少なからず存在することを示すことはできた。

研究の一部は「橋本ら：特異的言語障害を伴う発達性ディスレクシアの1例、高次脳機能研究」に掲載予定である。

共同研究者：岩田みちる・柳生一自・関 あゆみ